



長野県林業総合センタ - 塩尻市片丘 5739
 Nagano-prefectural Forestry Research Center
 TEL 0263-52-0600 FAX 0263-51-1311

カタオカザクラ

キ-ワ-ド:カタオカザクラ、カスミザクラ、片丘

新しい植物が発見されると、名前が付けられます。植物の名前は、植物の形態的な特徴や発見された地域などから名付けられています。植物図鑑を見ると、当所の所在地である塩尻市片丘と同じ「カタオカ」の名が付いた「カタオカザクラ」という植物があります。このサクラは一体どのようなサクラなのでしょう？

植物の名付けかた

カタオカザクラの話をする前に、植物の名前について、簡単に説明します。

「植物の名前には二種類ある」というと「おや?」と思われる方もあるかと思います。植物の名前といえば、ブナ、カラマツ、ウメなどの事だと思われる方も多いと思います。しかし、日本語で書かれた名前では、外国の人には通じません。日本語の名前を「和名」と呼び、世界共通の名前である「学名」と区別しています。

世界共通の名前である「学名」はラテン語で書かれており、細かいルールはありますが、基本的には「グループ名」と「種名」という、人間にたとえるならば「名字」と「名前」のような2種類を組み合わせています。先に挙げた「ブナ」は「*Fagus crenata*」となっています。このうち「*Fagus*」がブナの仲間という意味で言わば「名字」にあたり、「*crenata*」がブナを示す言わば「名前」で、「*Fagus crenata*」で「ブナ」という木を指すこととなります。参考までにカラマツは「*Larix kaempferi*」、ウメは「*Prunus mume*」です。

カタオカザクラとは

カタオカザクラの「カタオカ」は、塩尻市片丘の意味で、塩尻市片丘で発見されたことに由来しています。カタオカザクラは、片丘国民学校(現片丘小学校)に勤めていた久保田秀夫氏



カタオカザクラの花

(元東京大学理学部附属植物園日光分園主任)が、学校林で昭和20年の5月に発見したサクラです。

久保田氏が、生徒を連れて学友林に下草刈りに出かけていたとき、樹高40～50cmの小さなサクラがぽつぽつと花を着けているのを見つけました。

一般にサクラは10年以上経たないと花を咲かせません。ところが、このカタオカザクラは芽が出てから2～3年で花を付け、大きくなっても4～5m程度にしか育たないという変わった性質を持っていました。

このサクラは、昭和27年にカスミザクラの新品種として認められ、「カタオカザクラ」と命名発表されました。ちなみに、カタオカザクラの学名は「*Prunus verecunda* f. *Norioi*」です。これは発見者の長男で、若くして亡くなった詔夫(のりお)さんにちなんで「*Norioi*」とされました。

カタオカザクラは、発見当時、塩尻市片丘の日当たりがよいカラマツ植林地にポツポツと生育していたという事ですが、昭和35年頃に発生した山火事によって、発見当時の立木は失われました。

しかし、発見者の久保田氏が、現地で採取して日光植物園に移植させた1株が生き残っていた事がわかり、接ぎ木苗を作ることが出来ました。このときに出来た苗木が昭和59年に塩尻市役所へと里帰りし、地元で生まれた「カタオカザクラ保存会」の皆さんの努力で少しずつ増やされ、片丘小学校や原産地に近い農協の保養施設などにも植えられるようになりました。

カタオカザクラは、原産地からはすでに絶滅してしまったと考えられていますが、塩尻市片丘地区にある「カタオカザクラ保存会」の皆さんの努力で、地域の大切な資源として保全されています。

現在、塩尻市内の地名が付けられた植物は、カタオカザクラ一種のみです。もし、山の中で芽が出たばかりなのにもう花を咲かせているようなサクラを見かけたら、教えてください。絶滅していたと言われるカタオカザクラの生き残りかも知れません。

参考文献

はまみつを(1997)：カタオカザクラ物語，塩尻市教育委員会発行，50pp

塩尻市誌編纂委員会(1992)：塩尻市誌第一巻 自然，塩尻市発行，1004pp

川崎哲也(1993)：日本の桜，山と溪谷社発行，384pp

カタオカザクラ保存会(2002)：カタオカザクラ保存活動10年の歩み，26pp



林業総合センター構内に咲く
カタオカザクラ(樹高5m)

担当者 育林部 小山泰弘